

平成二十五年第二十三回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

本当の強さ

山崎 大雅 (小四)

今も世界のあちこちで戦争が起こっている。そんなニュースを見るたびに、どうして人間は戦争をするんだろうと、ぼくはずっと不思議に思っていた。

たとえば、動物たちにもなわばりというものがある。自分たちが生活する場所を決めていて、入ってきた敵をこうげきする。でもこれは守ることが目的で、人間みたいに無差別にこうげきしたりはしない。悲しい思いをしても、人は戦争を何度も何度もくりかえす。いろんなことを考えて、行動できるはずなのに。

ぼくのひいおばあちゃんは、八人兄弟だったけれど、戦争で五人亡くなってしまった。仲の良かった友だちも、近所の人も、つぎつぎといなくなってしまうと、さみしそうに話してくれた。大切な人がどんどんいなくなってしまうたら、ぼくだって悲しいし、一人ぼっちになるかもしれないと考えただけでこわい。人間にお母さんをうち殺されて、おばあちゃんも死んで、一人ぼっちになってしまったくろくまは、心を閉ざ

した。きっと、さみしくてこわくて、たまらなかつたんだと思う。ぼくだったら、一人でどうしたらいいのかわからないし、人間のせいだってうらむかもしれない。でも、くろくまはちがった。人間をうらんだりしなかった。(いい人間もいる。にくむよりも、きらうよりも、自分が立派になって、強く生きていけばいい)くろくまの言葉にぼくは、おどろいた。くろくまは力が強くおそれられていたけれど、本当に強いのは心だ。自分の中にある怒りやくやしさと戦った。人間は、心が弱いから、戦争をくりかえすのかもしれない。

この前の法事の時、ぼくはひいおばあちゃんのことした日記を見せてもらった。家族のこと、友達のこと、庭の草木のことが一日も欠かさず記されていた。ひいおばあちゃんは戦争の話をするとき以外は、明るくて元気でとっても面白かった。もういなくなってしまったから、悲しい過去からどうやって立ち直ったのか、聞くことはできない。でも、その日記をみていたら、たくさん楽しい思い出が、ひいおばあちゃんを支えていたことがわかる。悲しい過去は消えないけれど、くろくまは、レストランにやってきた森の仲間たちといっしょにしていることで、きっと笑顔が増えていくと思う。家族に囲まれて、いつも笑っていたひいおばあちゃんのように。

一冊の本に出会ったことで、くろくまは、大切なことに気付いた。笑顔と思いやり。そして、二度と会えない家族でも、心の中にちゃんといっしょにいてくれるということ。

ぼくは、くろくまの言葉で、自分の心の弱さを知った。人がなぜ戦争をくり返すのかも少しだけわかった。ぼくも、つらいことや、くやしいことがあっても、人のせいにしたらず、きちんと受け止めて、前に進みたい。

対象図書名　くろくまレストランのひみつ

大賞への審査員のことば

戦うことについて、筆者は 自分の中にある怒りやくやしさと戦った。人間は、心が弱いから、戦争をへりかえすのかもしれない。「と書いています。この年齢でも深い洞察だといえます。また、ひろおはあちゃんを知るためにひろおはあちゃんの記事を読むことには必ずしもついでではない。ひろおはあちゃんという家族ではあるけれども筆者からすれば必ずしもいびん違う時代を生きた先祖に近い人です。日記を読むことを通じてひろおはあちゃんの人生活や時代に想像力を働かせることができた。読むことには必ずしも苦しいことだけじゃなく楽しいことでもあります。読むことには必ずしも苦しいことでも励まされる。ひろおはあちゃんのことばを聞いてもらおう。

受賞者のことば

「夏休みに書いた読書作文、大賞だって！」
学校から帰ると、母がうれしそうに教えてくれました。最初はびっくりして、信じられませんでした。

ぼくは、この本の中の「にくむよりも、きらうよりも、自分が立派になって、強く生きていけばいい」という言葉が本当に心に強く残っています。世界中から戦争がなくなって、ぼくみたいに戦争を知らない子供が、もっともつとふえるといいなと思います。

今回こんなにもすごい賞をもらって、とてもうれしかったです。ありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞(小四)

私の名前

辻菜那

「グリーンゴンは、どう？ グリーンで、緑っていういみだよ。緑色のかいじゅうだから、グリーンゴン」

この本には、緑色のかいじゅうが出てきます。これから長いたびがはじまります。それは、本を読んでものお楽しみです。

私の名前は、辻菜那です。どうして、「なな」という名前がついたかというと、私は、平成一六年二月五日生まれです。一六年の一と六をあわせると、七。二月五日の二と五をあわせると、七。それで、「なな」とつけたそうです。私は、そのことを3年生のころに知りました。その時は、ちょっとびっくりしたけど、正直言うと、そんなうれしくありませんでした。私の「なな」には漢字はあるけど意味は、たぶらないと、思ったからです。私の友達に、名前の由来を聞くと、みんな漢字に意味がありました。私は、もう一度自分の名前について、考えてみました。一年は、三六五日です。その中で二月五日に生まれたということ。そしてお父さんと同じ二月五日がたん生日だということ。

「お父さんと同じ日に生まれたよ。」と、聞いた時は、本当におどろきま

した。きっと、私が生まれた時、お父さんは、

「やったー。二月五日生まれだ！ いっしょだよ。」とつてもううれしい。」

「三六五日ある日のたった1日、二月五日だ。」

と、言って喜んでくれたと思います。

一年生の時、学校の授業で、友達のいいところを紙に書こうというのがありました。その時私のことを書いてくれた人の中に、よくみると、漢数字の「七」と書いている人がいました。ちょっと悲しかったです。

それに、二年生の女の子に、「一二三四五六七ちゃん」など言われたことがあります。その時は、わらって、ごまかしたけど、心の中では、いやなきもちでした。

二月五日生まれだから「なな」という名前は、もしかしたら、世界で一つかもしれない。そして、たかさんのぐうぜんが重なって、お父さんたちがつけてくれたんだと思います。

これまで、自分の名前について考えたことがありませんでした。グリーンゴンのおかげで、「なな」という名前が好きになった気がします。名前はかえられませんが、お父さんと、お母さんが、一生けん命に考えてつけてくれた名前です。「大きく元気に育ってね。一年に一回の二月五日を大切にしてくね。」という気持ちもこめられています。

自分から進んで何でもできる「なな」になりたいです。

夏休みがすぎて、1カ月がたち、夏休みに書いた作文のことはすっかり忘れていました。

私の作文が賞に選ばれたと聞いたときは、本当にびっくりして、うそではないかと思いました。

ふり返ってみると、夏休みの作文教室は、ちょっと難しかったです。本の登場人物の気持ちをさぐってみたり、自分の書く作文テーマを考えるのが大変だったからです。そんな時、「ぼく、自分の名前について書いてみようかな。」と、友達の声が聞こえてきました。それがきっかけで、私は自分の名前について書くことにしました。その友達が作文教室にいなかったら、作文を書きあげることではできなかったかもしれません。作文を書き始めると、「こういう感じでいいのかなあ」と心配にもなりました。何度も書き直し、清書して、お父さんとお母さんに見せると、よく分からないけど笑われました。

「菜那」の本当の意味は、私が大人になった時に教えてくれるそうです。今思えば、このテーマで書いてよかったです。

小学生の部・最優秀賞(小五)

自分の存在を見つめ直す

林田 知仁

『君は、どんな人になりたい?』この問いかけが、ずっと、ぼくの頭の中をぐるぐるとかけめぐっている。

何度考えても、ちつとも答えは出てこない。だって、「どんな人」は、言い換えれば、「自分はどんな生き方をするのか」と突きつけられていることと同じだからだ。

『どんな人になりたいか』を考えることは『何になりたいか』を考える以上に大切なことなんだ。本当にすばらしい生き方や人間の偉さをはかる物差しっていうのは、社会的な地位や肩書きや持っているお金の多さなんかじゃない。自分のまわりを明るく照らしながら、どれだけ、一日一日を大切に、精いっぱい生きているか、なんだ。

病気になった父さんがシンイチとアスカに言った言葉。ぼくの心にも突き刺さった。左利きなのに、左半身がまひした父さん。死ぬような目にあって、リハビリも思うようにいなくて苦しんでいるのに、「痛いってことは生きてる証拠。」と、今は『頑張らない』を頑張っている父さん。

ぼくのじいちゃんも六月に倒れた。病院にいる間ずっと、ばあちゃんに「動きすぎたらいかんよ。」と言われていた。何にも言わないけど、じ

いちゃんも頑張らない努力をしていたんだろうな。退院してから毎日、散歩に行くのを欠かさない。じいちゃんも、あせらず、あきらめず、一日一日を大切に生きている。

僕が小さい頃、母も長く帰ってこなかった。死ぬ目にあった母は何を考えただろう。さびしくて泣く僕を連れて、ばあちゃんが看病に行っていた。小学校一年だった兄ちゃんは、朝ご飯を作ってくれていた。兄ちゃんも、アスカと同じようにがまんしていたのかな。

「ライジング・父・サン」の名の通り、父さんは、厳しい「冬」を越え、まるで春のお日さまになってまたのぼった。力強くて、眩しく輝く夏の太陽から、そこにいるだけでまわりの人の心が温かくなる春の陽に進化した。きっとそこには、弱い自分と戦い続けた毎日と、生き方について考えた時間があったのだと思う。シンイチやアスカもまた、成長した。

僕の心にずしんと乗っかって、響いている言葉がもう一つ。笑ってそれを言った父さん。『あきらめない限り、それは実現する途中。』シンイチも、願かけの庭の石運びをしながら繰り返し自分に言い聞かせていたね。

僕は、優しくなりたい。今度誰かが入院しても、絶対に、家族の誰も不安にさせない。今は、僕が家族に守られて生きている。まだまだ、小さい存在だ。でも、あの言葉が僕を勇気づける。『あきらめない限りきつと実現する』んだ。いつかきつと、僕が家族を守りたい。人に優しくで

きる、ぶれない心の強さを持ちたい。人の知らないところでも、良いことを努力する人になろうと思う。今、僕は、人や家族を守る仕事に興味を持っているんだ。

対象図書名 ライジング父サン

小学生の部・最優秀賞（小六）

信じる力

豊田 麻衣

人を信じる事、それは人を愛する事。つまり、人を信じなければ、人を愛していないという事になる。又、自分が相手を信じれば、自分は相手に信じてもらえる。自分は相手とつながる事ができる。

最も信じられる存在、それは家族。でも、もし家族の一人が倒れたら、まず何をするだろう。病院に電話をしたり、軽い手当てをしようと思う。すると、知らない間に自分の心の中で、「ファンキン」というものが住みついてしまう。その症状は、毎日その心の持ち主に大きな不安をあたえてしまうだろう。でも、この始末の悪い「ファンキン」は退治する事ができる。その方法は、倒れてしまった家族を信じる事である。「ファンキン」は「もうダメだ。」とか「助かるのだろうか。」と思ったりすると、誕生する。だが、「絶対に良くなる。」や「必ずやってくれる。」という言葉を発したり思ったりして人を信じぬく事で「ファンキン」は弱っていき逃げていく。

昔、私の祖父はある病気で入院した。胃がんだ。だが、なぜ胃がんになったのかは、私にはよく分からなかったが、検査をして祖父は、ある

手術をする事になった。胃を全て取り除く事だ。私はいきなりの事で何が何だか分からなかった。でも時間は止まってくれなかった。そして、祖父の大手術が始まった。みんなが黙って手を合わせていた。私も黙って手を合わせていた。すると、私の心は「ファンキン」に住みつかれたのか、不安におしつぶされそうになった。数時間経ち祖父の手術は無事終了した。私は全身の余分な力が一気に抜けた。祖父はそのまま眠り続けていた。私達はもう夜も遅かったので、とりあえず家に帰る事にした。

次の日から、毎日お見舞いに行く事にした。だから毎日、祖父を見てみるとだんだんやせ細っていくのが分かった。ただ、祖父は私達を見る度にいつも笑っていた。私は、そんな祖父の顔を見ると何か不思議な気持ちになった。気付けば私の目から涙があふれていた。そして私は必ず病室から出て涙をふいていた。みんなに涙を見られたくなかったからだ。だが時々、涙のあとがくつきり見える時があった。すると、祖父が「大丈夫やから、泣かん」と言ってくれた。私は「うん。」とうなずきながら涙をふいた。祖父は、どんな事があっても笑っていた。私は、なぜそんなに笑っていられるのかと不思議に思っていた。だが、ふと気付いた。祖父はこの病気が治ると信じて笑っていたのか・・・と。私は優しい祖父の事をとても尊敬している。あんなに重い病気なのにそこまですべて笑って入れるなんてすごいと思ったからだ。現在、祖父はとても元気でたくさん食べるようになった。そして、たくさん笑っている。

信じる。それは、人を愛する事。私は、これからも人とつながり、今

を生きていく。

中学生の部・大賞

対象図書名 ライジングゲ父サン

「共に生きる！」

グレドル 輝覧(中三)

「人種差別」それは、明らかに黒人への弾圧だ。アパルトヘイト下で、黒人たちがどれほどの迫害を受け、差別されてきたのか。白人が主人で、黒人は仕える側。白人の役に立たない黒人は、生きる資格がないと言っているようなものだ。この悪しき政策が何と数十年もの長きにわたって続き、ようやくピリオドが打たれたのが一九九四年。僕が生まれるほんの少し前ということになる。

僕は、イギリス人の父と日本人の母との間に生まれた。いわゆるハイフだ。と言っても、日本で生まれ育ったので、自分としては日本人の気質の方が強いと思っている。ところが、見た目がいかにもイギリス人なので、何かと面倒なこともある。「英語と日本語、両方話せてうらやましい」とか、「足の長い外国人体型でカッコいい」などと言ってくれる人もいるが、僕のこれまでの人生は、そんな気楽で単純ではない。例えば、英語の授業の時だ。先生にあてられて、よく僕が答える。学校はアメリカ英語なので、イギリス英語とは発音や表現が異なる。僕が発音する英語がみんなにとっては聞き慣れないらしく、全員が笑う。そして、一勢

に「違うだろ！」という。あげくの果ては、「おまえ、ハーフのくせに英語が変だよ」というせりふになる。みんなにからかわれる度に、僕は心の中で「またか・・・。」とつぶやく。そこでムキになって、解説する気にもならないのだ。

日本人はとかく仲間意識が強い。それはいい時もあるが、僕にとつて困ることもある。今は日本中至るところに外国人がいるので、珍しくもないが、それでも日本人は自分たちと異なる者を寄せつけない。つまはじきにする。それは、子どもの世界にもある。実際僕は何度もそんな目にあっている。「外人のおまえなんかに分かるわけがない」とか、「どうせ日本語が通じないんだから」など。言葉も態度もあからさまだ。「外人」と言われる時点で、僕はすでに疎外されている。よそ者はあつちに行けという事だ。その傾向は中学生になってからエスカレートした。言いがかりをつけられ、つかみ合いのけんかになったこともある。向こうから仕掛けてきた。売られたケンカは買うしかなかった。ぼくは剣道で鍛えているので体力には自信があった。でも力づくで相手をねじ伏せても、それで決して気持ち晴れたりしなかった。むしろ、あと味の悪さだけが残った。これでは、武力で人を抑えつけようとする軍のやり方と変わらない。力づくや武力では真の解決にはならないのだと、今なら心から思える。

日本のような平和で全てに恵まれた国で暮らしていると、それが当たり前のように思えるが、他の国に目を向けると、その厳しい現状に驚か

されたりする。去年の夏、父の友人を頼って僕たち家族はモロッコへ旅に出た。目的地まで車で移動中に、僕が目にしたさまざまな光景。美しい自然とは対照的に、ここでも黒人たちの貧しさがひと目で分かった。雨風が何とかしのげるような家。ぼろぼろの服を着て走り回る子ども達。

僕が最も驚いたのは、モロッコの子どもの就学率の低さだ。モロッコでは七年間の初等教育は、無料にもかかわらず、多くの子どもは学校に行かないという。特に農村部の女子は、学校よりも仕事の手伝いが優先される。だがら、読み書きの出来ない大人も多いと聞き、僕はショックを受けた。教育を受けないから、貧困もどこまでも続く。そう考えると、とても切なくなる。これもある意味では、「人種の壁」と言えるのではないだろうか。

サムの祖国、南アフリカ。僕達にとってはただ遠い国というイメージだった。つい先日まで・・・。

丁度この本を読み終えた夏休み前、何と偶然にも南アフリカの人と話す機会を持てた。英語の時間に、他校でALTの先生として働いているという二人の黒人男性が紹介された。年齢からすると、彼らは明らかにアパルトヘイト下の苦しい時代を生き抜いて来たことになる。学校の毎日の給食が大きな命綱だったという。この仕事に就くまでに多くの難関を経て来たこと。そして彼らのように夢を実現できるのはほんの一握りだということ。今こうして、日本でALTの教師として働けることが、とても幸せだと言っていた。

イギリスが南アフリカを手中に収めていたその長い歴史を思うと、僕はやはり胸が痛む。彼らは、イギリス人を恨んでいないのだろうか。意外な答えが返ってきた。「イギリスはすばらしい国だ。イギリス人も友好的で、僕は大好きだよ。」と、僕の目を見て笑った。僕は、その言葉と笑顔に救われた。

未来を担う僕たちは、「人種の壁」など絶対に作らない！僕はサムにそう固く誓った。

対象図書名 大地のランナー

大賞へ、審査員のひとこと

僕のこれまでの人生は、そんな気楽で単純ではない。」

中3の子が人生というには普通は大げさなのですが、筆者はまさに人生を語っている気がしました。その人生は、たまたまイギリス人のお父さんと日本人のお母さんの間に生まれて日本に育つという環境の中で、いろんなことが見えてきたことがわかります。

日本人の特質や、本の題材になっている人種差別の問題が、故郷がなかば異郷であるような人生の中で見えてきて、そのことについて私達に問題提起をしてくれているところを高く評価したい。優れた作品です。

受賞者のひとこと

小学一年生で入塾した僕にとっては、八年以上セミナーで学んできたことになる。毎年欠かさず作文コンクールに参加してきた。たくさんの本を読み、作文もたくさん書いた。読書の楽しさを知り、何とか作文が書けるようになっただけでも、自分にとっては「成長」だと思っている。セミナーでは毎年のように上位入賞者が出る。「すごいなあ。」と尊敬の気持ちを持ってその人たちに拍手を送ってきた。僕は今までずっと入選だった。去年初めて特選になって自分としても頑張ったと喜んでいたら、そんな僕が今年、まさかの「大賞！」。拍手を送られる側になり、僕は戸惑うばかりだった。

「大地のランナー」を読んで、僕は人種問題について深く考えさせられ、同時に自分自身にも真剣に向き合うことができたように思う。先生が「輝覧にしか書けない作文を書いてごらん。」と言ってくれたおかげで、僕は今までになく、粘りに粘って全力で書き上げることが出来た。コンクール最後となる中学三年に、このようなすばらしい賞をいただくことが出来て、感謝の気持ちでいっぱいです。

中学生の部・最優秀賞(中一)

信念を貫く！

吉澤 龍人

高い理想を掲げ、大きな夢を追いかける。その夢を実現させるために、自分の信念を貫き通す。それは、決してたやすいことではないはずだ。理想が高ければ高いほど、夢が大きければ大きいほど、障害も多くなる。実現が難しくなる。どんなことがあってもあきらめない「強さ」が、自分の運命を切りひらくのだ。サムの生き方を通して、ぼくは強くそう思った。

人は何かのきっかけがなければ、なかなか自分自身を変えることは出来ないと思う。目標がなければ、そのきっかけさえもつかめないような気がする。

ぼくの場合、サッカーを通して自分と向き合うことが出来たように思う。小さい頃からボール遊びが好きだったぼくを見て、母がサッカーを勧めたのがきっかけでサッカースクールに入ることになった。そもそもサッカーがどんなスポーツか全く知りもせず入ったぼくは、いつもお気楽に過ごしていた。幼稚園児のぼくが何かにムキになるはずもなかったのだ。楽しく体を動かし、友だちも出来たらそれでいいと両親も思っ

いたようだった。ぼくは、何の目標も緊張感もなく、ただ「何となく楽しい」時間を過ごしていた。自分もそれでいいと思っていた。そんな、のんびりムードがかなり長い間続いていた。

だが、ついにそんな自分とさよならする日が来たのだ。ぼくが四年生の時の交流戦があった日。いつものようにぼくは緊張感もなく、ヘラヘラしていた。遊び半分に等しかった。相手チームに点を入れられても、悔しいとも思わなかった。「ま、いいか」という気持ちだが、そのまま態度に現れていたと思う。試合中にもかかわらず、全く真剣さに欠けていた。体力もないぼくは、疲れると、ボールを追いかけることそのものをあきらめたりした。一人でもぼくのようなやる気のない人間がいたら、結果は、明白だ。案の定4対0で、ぼくのチームは惨敗した。

今、思い返すと本当に恥ずかしくてたまらない気持ちになるのだが、あの時は、負けても悔しさのかけらもなかったのだ。

その日家に帰ると、珍しくぼくの試合を観戦した父が、ぼくを待ち構えていた。今までに見たことのない険しい顔だった。ぼくは正座させられた。「何やってんだーっ！！」父の大声が家中に響いた。これまでぼくは、めったに父に怒られたことがなかった。いつもは、穏やかに悟すように注意してくれる父だった。だが、この時は違った。「あの試合は何だ！あの態度は何だ！交流試合だろうが、試合は真剣勝負なんだぞ。真剣に戦わないやつは試合に出る資格がない！いい加減な気持ちなら、サッカーをやめろ！」と、すごい剣幕だった。こんなに怖い父を見たのは初め

てだった。

ぼくは一人になって考えた。両親が長い目でぼくの成長を見守っていてくれるのをいいことに、ぼくはそれに甘えていた。せつかく入れてもらったサッカースクールなのに、いつもヘラヘラして、本気でやらなかった。あまりにも情けない息子の姿に、父はたまりかねたのだろう。ぼくが力いっぱい戦って負けたのなら、父は、あんな風に怒ったりはしなかっただろう。ぼくは、これまでの人生でこの時ほど自分を情けないと思っただけでなかった。

この日からぼくは変わった。心を入れ替えて練習した。あえてきつい練習を自らに課した。家でも時間があればボールに触れていた。「絶対勝つ！」という強い気持ちをいつも忘れなかった。翌年の交流戦は持てる力の全てを出して戦った。ぼくは必死にボールを追った。「絶対勝つ！」という気迫がチーム全体にみなぎっていた。結果は2対0でぼく達が勝った。みんなの気持ちが一つになると、これほど違うものかと驚いた。この時ぼくは初めて達成感を味わった。まさに力いっぱい戦った者だけがかみしめることの出来る喜び。「勝つ」ことの意味の大きさを知った瞬間だった。

勝利の喜びは、言葉では言い尽くせないものだ。どんなスポーツでも、そこに至るまでの道のりは決して平坦ではない。まして、サムのコメダルは、不可能に等しかっただろう。それだけに、孤独な戦いだっただけだ。ぼくと大きく違うのは、サムは自分のために走るのではないとい

うこと。家族や祖国、そして自由という、とてつもなく大きなものを背負って走ったのだ。

今も、武力で傷つけ合っている国がある。武力は何の解決ももたらさない。武力ではなく「走る」ことで人種差別に挑み、手にした金メダルは、まさに正義の象徴だと言える。

対象図書名 大地のランナー

受賞者のこと

二年連続「最優秀賞」という大きな賞をいただき、本当に夢のようなことだ。今回の課題図書「大地のランナー」は、とてもスケールの大きな内容だったので、僕は何を書こうか、正直悩んだ。主人公が挑むオリンピックと、自分のやってきたサッカーでは、比較にならない程かけ離れていた。それでも僕は、サッカーへの取り組みを通して自分が変わったことを本気で書いてみようと思った。書いている内に、「あきらめない心」という共通点を見い出すことができた。そして改めて、何か一つのことだけに打ち込むことの大切さを知ることができた。

作文を書いている途中で、父のせりふが上手く表現できていると先生にほめられ、僕はそれがうれしくて、どんどん書く意欲につながっていったのだ。

受賞の知らせを聞いた両親もとても喜んでくれた。その日一日、数え

きれないほど何度も「おめでとう！」を言われ、僕もうれしきでいっぱいになった。これからも、本をたくさん読み、いろいろなことを考えていきたい。

中学生の部・最優秀賞(中二)

僕のライジング母さん

西山隼人

「ライジング父さん」を参考書で見つけ題名が印象に残り、そのうえ内容が僕に似ているように感じたので選びました。少し、違うけれど、母が入院したことがあります。それは小学校高学年の時でした。病院で見てもらって、ポリープがありました。取り除いてから、結果を待つ日、家族の会話が減り、大丈夫と声をかけても、あまり希望をもてませんでした。小学校から帰宅すると、目の前で母が泣いている姿が飛び込んできました。眼中には母しかありませんでした。その姿に心が苦しくなり、ぼくも泣いてしまいようになりました。病名はガン。母がいない家でどうしていけばよいのか、そしてそのことが、自分という存在を見つめ始めるきっかけとなりました。母がガンになるまでの日々は、なんとかなるだろうと何事も後回しにしてきました。自分のことだけを考えると、母や父の気持ちは、あまりわかっていませんでした。手術後は、とても大変だったことを覚えています。いつも母にまかせっきりの僕たちが家事することで、本当に母の大切さや家族の絆に気づかされました。いつも母に迷惑をかけてしまっていたと思います。友達と釣りをしてい

てケガをしてしまったことがあり、母に心配をかけてしまいました。

今、母は百パーセント治り、体を自由に動かしたり普通の生活にもどりました。その後は定期的に検査があり、それがいちばん辛く、プレッシャーだけど、少しでも長生きできるためと言っていました。シンイチの父親が言っていたように0〜百になるより0〜1になるほうが大変だったんだと僕も感じることができました。一番感じたのは、感覚マヒのことだと思います。いつものペースと術後のペースのちがいで、とても苦しい思いをしていたと思います。なにより百パーセント治るのには年数がかかるけど、自分の体とうまくつきあつていくと言っていました。

母の手術の事は、あんまり思い出したくありません。病院で泣いたこともありました。言葉で表せないくらい悲しかったです。でも、母の悲しみの方がずっと大きかったと思います。体験したことない人にはわからないくらい悲しみです。助け合いという思いを体感しました。母の大切さ、向きあい方も変ってきました。身近にいるけれど、とても大きな存在なんだと、改めて思いました。世の中にはそんな病気で亡くなる人もいます。止められないのは、自分の弱い心と悪い心があるからです。どんなにいやな事があっても命をうばうのは間違っています。自分の人生や家族の人生を台無しにしてしまいます。人を悲しませたり、困らせたりすることが殺人につながるわけではないけれど、それは人を傷つけることにかわりはありません。自分たちの悪ふざけで人を困らせたりせ

ずに、家族をもっと大切にすべきだと思います。僕にとってはもう一つ体験があります。親せきの子どもで、自分の部屋で亡くなっていたのです。シンイチのお父さんと同じように脳梗塞でした。夜中に倒れていて発見が遅くなってしまいました。その子の親が悲しんでいると聞き、それだけで泣き崩れている姿が思い浮かびました。助けたくても助けられない命。母は助かった命です。母の大きい存在にいつも助けてもらってきたので助かって本当によかったと思っています。今も健康で生きてくれた感謝でいっぱいです。母自身も命の大切さを知り、家族や親せきのはげましのおかげで、助かったに、ちがいません。そして、「どんな人になりたいのか」を考えることは、とても大切なことです。ぼくは、人と人とのつながりを大切にし、助け合いをする生き方をしたいです。今まで、母は大切な家族としか思っていました。今、母は見守ってくれ、大切に思ってくれている、大きな存在になりました。今までは、何とかなるだろう、いつかできるだろうという甘い考えをしてきたけど、それを変えることができたと思います。変える事ができたのは、先生の言っていた言葉です。それは、「今日を限りと思うことです。今日が限りなら一日一日を精一杯、充実した日にすると思います。だからそれを毎日つづけていくと、だんだんといい人生だと思えていけるはず。人間一歩づつでもいいから前進していくのが大事だと思います。」

中学生の部・最優秀賞(中三)

「マイロード」

真田 みなみ

私たちは今、「人生」という長い長い道程を歩んでいっている。たくさん
の壁にぶつかり、たくさん
の困難を乗り越えていきながら。

私は、「大地のランナー」という本を読み道程というものの大切さを感じた。そう感じた私にとって、「終わり良ければすべてよし」ということわざについて少し考えさせられた。このことわざは、結末さえ良ければ、その過程にどのようなことがあってもかまわない。という意味をもっている。しかし私は、少しちがうと思う。その結末に至るまでに、たくさん
の失敗、成功、喜び、苦しみ・・・など、様々な出来事や想いがあったはずだ。この物語において、サムがオリンピックで金メダルをとった。それは、人種差別が快方へ向くことに大きな影響を与えた。めでたし、めでたし、なのか。私はサムが優勝するまでに、アパルトヘイトの残酷さや、サムの兄たちやマンデラたちの生き方などがサム自身に与えた影響などが入り混じってはじめて感動することができると、私はそう思う。

また、サムの走りから、最後まで決してあきらめないことについて学んだ。スピリドン・ルイスやアベベ・ビキラのように、自分のペースで

着実に一歩一歩すすんでいく。そして、最後に結果はついてくる。私は無理だからといって最初から頑張らないのは嫌だ。確かに無理なこともあるかもしれない。でも、少しずつ近づいていくことはできる。私はそれを身にしみて感じている。

私は学校で硬式テニス部に所属している。部員の中に小さい頃からテニスをしていてとても上手な友人がいる。入部したての頃、私は彼女からほとんどポイントをとることができなかった。試合らしい試合にもならなかった。彼女は上手なから負けて当然だ、と思っていた。しかし、テニスがどんどん好きになってくるにつれ、できる技が少しずつ増えてくるにつれ、彼女に負ける度に悔しいと強く思うようになった。近づきたい。追い越したいとも思うようになった。彼女と私の「キャリアー」という大きな差は練習することでうめたい。テニスが大好きだからこそ、強くなりたい。今、私は彼女から一ポイントとるごとに飛び跳ねて喜びたくなるような衝動に駆られる。このような喜びを感じることができるのは、私が私らしく、あせらずに練習した甲斐があったからである。無駄なこともたくさんしてきたと思う。しかし、今までの私の様々なことをしてきた道程があったからこそ、喜びを味わえるかけがえのない瞬間がある。テニスをするにあたって、結果にこだわりすぎている自分がいた。結果にこだわることも大切である。しかし、頑張った道程がなければ結果は存在しない。また、テニスの上手な彼女にも彼女なりの努力した道程がある。だから私も、頑張ったその頑張りが実を結ぶ。そ

れはきつと難しいと思う。しかし、自分に限界をつくらず、小さな努力をコツコツとしていきたい。いつか、努力して彼女を越えることを夢見て……。

最後に、サミュエル、ニコロディマス、ルックスマート、マンデラなど、多くの黒人たちがアパルトヘイトに対抗するために多種多様な方法で闘ってきた。武力に武力で闘う人もいれば、サムのように自分が得意なことでも闘う人もいる。自由を勝ち取るという大きな夢をかなえるために。しかし、その夢である「自由」を見ることなく死んでしまった、ニッキーのような人も大勢いたことだろう。その人たちの分まで闘った人々によって、白人、黒人共に感銘を与えた。サムも感銘を与えた人々のうちの一人である。また、私たちはそれぞれ頑張りたいと思うことを持っているはずだ。十人いれば十人ともが異なる頑張りたいと思うことを持っている。まさに、「十人十色」。私にとっては、「テニス」である。きっとそれにゴールはないことだろう。みんな高い壁や大きな障害物を乗り越えながら、長い長い自分だけの道程を歩んでいくことだろう。おそらく結果がついてくることは、滅多にない。しかし、結果がついてきたときの喜びは、言葉ではあらわすことができない程素晴らしいものになるのではないかと思う。だからこそ、目標に向かって歩んでいく道程はきつと自分にとってかけがえのないものとなるはずだ。かけがえのない瞬間を味わうために、私は私らしく、あなたはあなたらしく、みんなはみんならしく歩んでいく。高い壁にぶつかりながら、寄り道をしながら。

家族に、友人に誇れる自分だけの道を歩んでいく。その自分らしい道程を大切にしながら、かけがえのない今を、マイロードを歩んでいこう。

受賞者のこと

私は今だに最優秀賞を頂いたことが夢のようです。

まだ、信じれていません。

私は、「大地のランナー」という本を読み感じたことを素直に書きました。そんな私の読書感想文が最優秀賞という素晴らしい賞を頂くことができ、とても嬉しいです。

私はこれからもずっとテニスを続けていきます。

この先どんな強いライバルがあらわれても、怖気付くことなく、私なりにテニスを頑張りていきたいと思えます。

この読書感想文をかくにあたって、今まで気付くことのなかったことも気づくことができました。

本当にありがとうございます。

対象図書名 大地のランナー